

〔報告〕 桃山文化期における輸入漆の調達と 使用に関する調査 (Ⅲ) —日本国内の出土漆器における輸入漆塗料の使用事例—

北野 信彦・小檜山 一良*・竜子 正彦*・本多 貴之*²・宮腰 哲雄*²

1. はじめに

寛永16年(1639)の鎖国令以前のいわゆる「桃山文化期」は、日本の文化史上、最も漆が必要とされた時代の一つに位置付けられる。この理由は、安土城・聚楽第・伏見城・大坂城などの大規模な城郭御殿の造営や、豊国廟・東照宮などの漆をふんだんに使った霊廟建築の登場、さらには江戸・名古屋・大坂・仙台をはじめとする各地の城下町整備に伴い、大量の漆塗料が必要とされたためである¹⁾。そしてこの時代を象徴する漆器として、比較的簡便に蒔絵加飾が可能な平蒔絵技法を用いた高台寺蒔絵や南蛮様式の初期輸出漆器などが登場した²⁾。

さて、この時代の需要に応えるために、平戸及び長崎のオランダやイギリス商館長日記などの文献史料は、大量の漆が東南アジア交易を通じてタイ・カンボジア・ベトナム・中国華南などから我が国に輸入されたことを記録している^{3,4)}。

筆者らは、これまで桃山文化期における輸入漆の調達と使用に関する調査として、京都市中の旧柳池中学校構内遺跡(京都市に登録された遺跡の正式名称は左京三条四坊十町跡であるが、以下、通称名である旧柳池中学構内遺跡と称す)、大坂城下町の町屋跡(OJ92-18次調査地区)、長崎市中の炉粕町遺跡(長崎奉行所跡)などから出土した四耳壺片や各種漆工用具に付着固化していた黒漆様樹脂の主要脂質分析を行った。その結果、日本・中国産漆に特徴的なウルシオール成分以外に、東南アジア産漆に特徴的なチチオールおよびラッコール成分を検出したことを報告した^{5,6)}。さらに、上記の旧柳池中学校構内遺跡から出土した漆刷毛などの漆工用具にも東南アジア産漆が付着していたため、桃山文化期における京都市中では何らかの輸入漆を使用した漆工産業が存在した可能性を指摘した⁷⁾。ところが、この時点では輸入漆の使用状況の実態は不明であった。

その後、筆者らの一連の報告を受けて、イギリスのビクトリア&アルバート美術館、フランスのルーブル美術館、アメリカのゲティー財団美術館などの海外の研究者は、各館所蔵の輸出漆器の分析調査を実施し、チチオール成分を検出したという報告を活発に行うようになってきた^{8,9)}。そして結論として、輸入漆塗料は輸出漆器に使用されたという解釈も提示された^{8,9)}。しかし、これらはいずれも一回は日本から海外に招来された伝世漆器の資料群(厳密にはヨーロッパで東南アジア産漆塗料を使用した塗装修理が行われた可能性を否定しがたい資料群)である。そのため、厳密にはこの結論は示唆的ではあるが、確実であるとは言い難いといえる。

筆者らは、その後も国内資料の調査を継続して続け、輸入漆の使用を裏付ける文献史料の記述とともに、新たに東南アジア産漆を使用した物的証拠の一つである出土資料を幾例か確認した。本稿では、この結果を報告するとともに、そこから導き出される桃山文化期における輸入

*京都市埋蔵文化財研究所

*²明治大学理工学部

漆の使用に関する一つの可能性について述べる。

2. 出土漆器に関する観察と分析

2-1. 調査対象試料

本稿では、旧柳池中学校構内遺跡において、タイ産四耳壺と同じゴミ穴廃棄土壙から一括で出土した約200個体強の漆器資料群のうち、輸入漆との関連性が想定された下記の試料 No. 1～No. 5 出土漆器について調査を実施した¹⁰⁾。

試料 No. 1：黒漆塗曲物板未製品① (図1-1, 1-2)

試料 No. 2：黒漆塗曲物板未製品② (図2-1, 2-2)

試料 No. 3：黒漆塗耳盥の把手部材 (図3, 参考資料：図4)

試料 No. 4：鶴亀文様朱漆器椀 (図5-1, 5-2)

試料 No. 5：鶴文様朱漆器椀 (図6-1, 6-2)

多数ある出土漆器の中からこの5資料を調査対象とした理由は、まず、これまでの筆者らの調査では、①タイ・カンボジア・ビルマ産の輸入漆は、国産漆に比較して艶光沢があり、黒い色調が強い固化皮膜を有するものが多いこと、②共伴した出土漆工用具には、チチオール成分が検出された朱漆塗料が付着した漆塗刷毛と漆塗作業台である塗り定盤と推測される板物の切り取り破片が含まれていたこと、③共伴した出土木製品の中に高台底に轆轤爪跡痕跡を残した椀未製品の白木椀が含まれていた。通常、白木の木地椀を作成する作業は木地師が担当するが、最終製品である轆轤挽き工程は漆器生産工房近隣地区で行われることが一般的であるため、近辺でこれら輸入漆と関連した漆器椀の生産が行われていた可能性が高いこと¹¹⁾、などを考慮に入れたためである。調査代表者である北野は、対象となる一括資料全点の悉皆再調査を行い、上記の黒色および赤色の漆塗料と類似した色相を呈する資料を目視観察で選別し、最終的にこれらを調査対象とした。

そのうえで、各試料は、漆器の塗装表面を目視観察した後、塗装の剥落個所が明確であるとともに採取可能な剥離片が見出された箇所から数ミリ角程度の小片塗膜を注意深く採取し、分析試料に供した。以下、試料番号と試料の採取箇所を記す。

2-2. 観察および分析方法

2-2-1 樹種同定

樹種の同定は、出土木材の内部形態の特徴を顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。調査試料は、調査可能であった資料 No. 1 と資料 No. 2 の本体をできるだけ損傷しないよう、破切面などオリジナルでない面から木口、柾目、板目の三方向の切片をカミソリの刃を用いて作成した。切片は、サフラニン・キシレンを用いて常法に従い染色と脱水を行い、検鏡プレパラートに仕上げた。

2-2-2 塗装および加飾の表面観察

塗膜表面の状態を目視観察した後、細部の観察は、(株)スカラ社製の DG-3型デジタル現場顕微鏡を使用して、残存状態が比較的良好な部分を中心に50倍から200倍の倍率で行った。さらに蒔絵粉の形態や細かいクラックなどの劣化状態に関する詳細な観察は(株)キーエンス社製の VHX-1000型デジタルマイクロスコープを用いて500倍から2,000倍の倍率で行った。

2-2-3 塗装構造の断面観察

まず肉眼で塗装および蒔絵加飾の表面状態を観察した後、1 mm×3 mm 角程度の剥落小片を、合成樹脂(エポキシ系樹脂/アルルダイト GY1251J.P., ハードナーHY837)に包埋した後、断面を研磨して薄層プレパラートに仕上げた。その上で、断面薄層試料の厚さや色調、下地の状態、使用顔料や蒔絵加飾の技法、などの内部状態を、金属顕微鏡および生物顕微鏡を用いて透過および落射観察した。

2-2-4 使用顔料や蒔絵粉における無機元素の定性分析

試料採取が可能であった各試料の無機元素の定性分析は、(株)堀場製作所 MESA-500型の蛍光X線分析装置を使用した。設定条件は、分析設定時間は600秒、試料室内は真空状態、X線管電圧は15kV および50kV、電流は240 μ A および20 μ A、検出強度は20.0~80.0cps、管球はパラジウム(Pd)管球である。

2-2-5 漆塗料の主要脂質成分の分析

肉眼で試料塗膜層の細部を観察した上で、先の試料小片を熱分析装置に入れ、500 $^{\circ}$ Cで12秒間熱分解させ、GC/MSに導入した。測定装置は、熱分析装置(フロンティア・ラボ製 PY-2010 D)、ガスクロマトグラフ(HP製 HP689)、質量分析装置(HP製 HPG5972A)で構成されており、分離カラムには Ultra Alloy PY-1(100% methylsilicone, 30m \times 0.25mm i.d., film 0.25 μ m)を使用した。

2-3. 観察と分析調査の結果

各試料について観察と分析調査を実施し、以下の結果を得た。試料 No. 1 と試料 No. 2 は、樹種同定の結果、いずれも木胎は針葉樹スギ材であった。これらはいずれも調査対象資料を選別した理由である①と共通する艶がある黒漆層が塗装されていたが、乾燥によるチヂミムラ現象が上塗り漆の表面に顕著に観察された(図1-1, 2-1)。両者の塗膜断面観察を行った結果、木胎の上に細かい粘土や珪藻土と糊もしくは膠を混ぜた淡い茶褐色を呈する泥系のサビ下地(生漆を用いた堅下地・本下地より堅牢性に欠ける)が一層施されていた。ただし、本調査で



図1-1：未製品である出土黒漆塗曲物板（試料 No.1.）（外面）

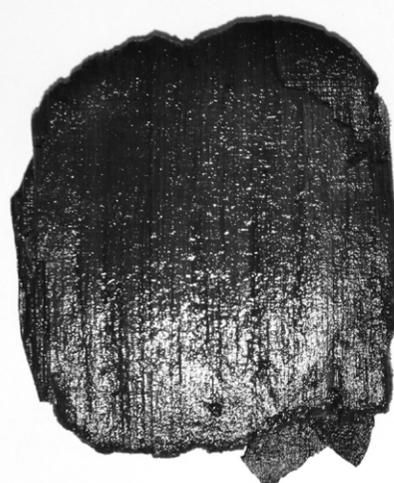


図1-2：同（内面）



図2-1：未製品である出土黒漆塗曲物板（試料 No.2）（外面）

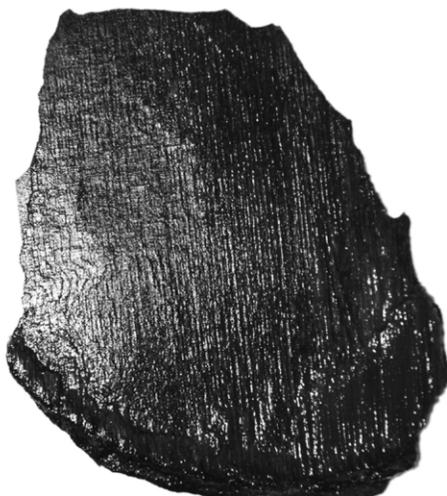


図2-2：同（内面）

は分析試料が微細なため、下地に混和されていると推定される膠・糊や生漆の科学的識別分析を行っていない。そのため炭粉を使用した下地の総称である「炭粉下地」との対比用語である粘土鉱物を使用した下地の総称として、「サビ下地」という表現を用いる。そしてこの上にチヂミムラによる緩慢な波打ち凹凸を有する黒い色調が強い上塗り黒漆層が一層観察された（図7）。

試料 No. 3 は、参考例である伝世品の耳盥の形態（図4）と同じ器型の把手部材である。この試料の塗膜断面観察を行った結果、木胎の上に布着せ補強の痕跡である布繊維が観察された。その上に、試料 No. 1, 試料 No. 2 とは異なる細かい粘土鉱物や珪藻土などを生漆に混ぜて作る堅牢なサビ下地を施しており、黒い色調が強い上塗りの黒漆層が一層観察された（図8）。

試料 No. 4 と試料 No. 5 は、黒色漆で鶴亀文様や鶴文様の漆絵が肉筆加飾された赤色漆器碗である。上塗りの赤色漆の使用顔料を分析した結果、いずれも水銀（Hg）の強いピークが検出された（図9）。そして、いずれも塗膜内には朱顔料（赤色硫化水銀：HgS）の比較的荒い粒子の混入が顕著に観察された。これらの塗膜断面観察を行った結果、試料 No. 4 は、木胎の上に若干組成が異なる堅牢なサビ下地が二層施されており、その上に上塗りの朱漆層が一層観察された（図10）。一方、試料 No. 5 は、本稿が調査対象とした他の試料とは大きく異なり、炭粉を膠もしくは柿渋などに混入して作成される炭粉下地が観察され、その上に上塗りの朱漆層が一層



図3：耳盥の出土取手部分（試料 No.3）



図4：耳盥の一例（伝世品：参考例）



図5-1：出土鶴亀文様朱漆器碗（試料 No.4）

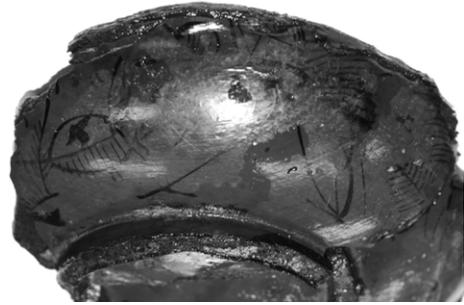


図5-2：同 鶴亀文様部分の拡大



図6-1：出土鶴文様朱漆器碗（試料 No.5）

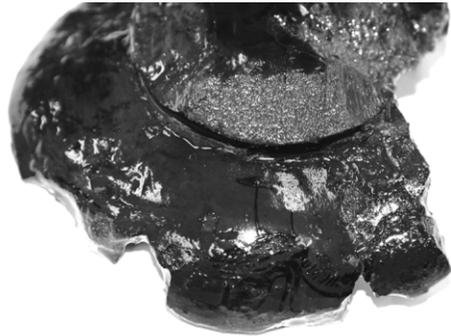


図6-2：同 鶴文様部分の拡大

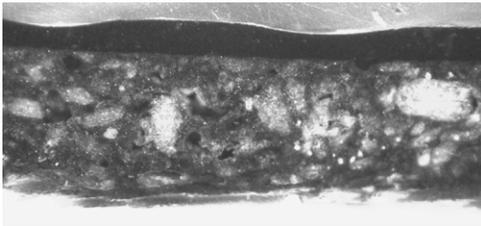


図7：試料 No.1,2の塗装断面観察

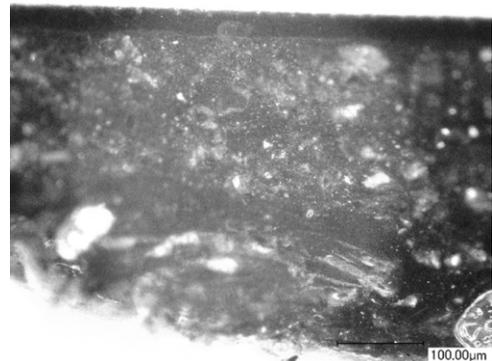


図8：試料 No.3の塗装断面観察

観察された (図11)。

次に、各試料に使用された漆塗料の産地を知る上で有効となる主要脂質成分を同定した。その結果、試料 No. 1、試料 No. 2、試料 No. 3、試料 No. 4 からは日本もしくは中国産漆 (*Rhus vernicifera*) に特徴的なウルシオール成分とタイ・カンボジア・ビルマ産漆 (*Melanorrhoea usitata*) に特徴的な側鎖に芳香環を持つチチオール成分の両者の特徴を示すピークが共存した状態で検出された (図12)。一方、試料 No. 5 からは日本もしくは中国産漆 (*Rhus vernicifera*)

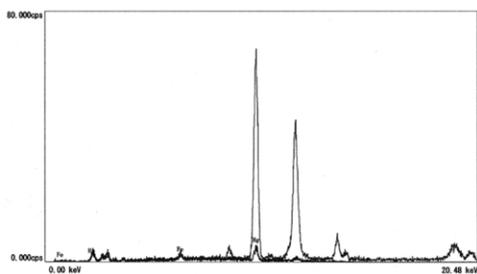


図9：試料 No.4の赤色漆の蛍光X線分析結果

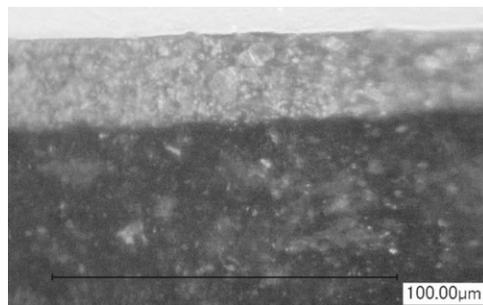


図10：試料 No.4の塗膜断面観察(朱顔料粒子の拡大)

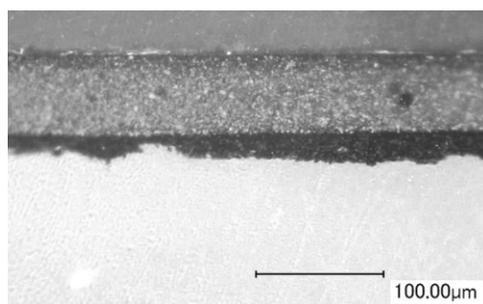


図11：試料 No.5の塗膜断面観察

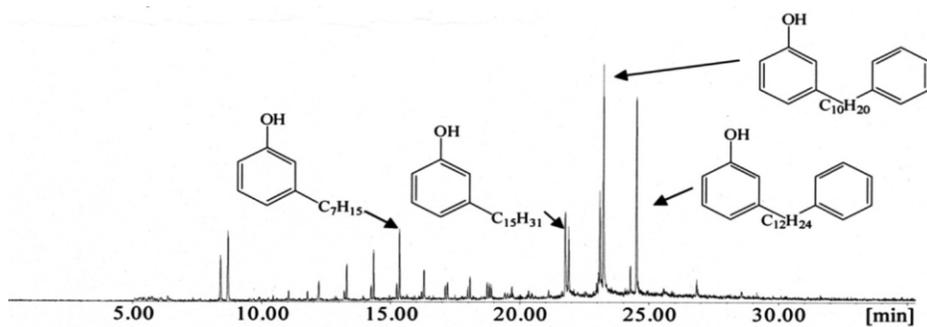


図12：PY-GC/MS分析による試料 No.4の主要脂質成分の同定結果 (チチオール+ウルシオールを検出)

に特徴的なウルシオール成分のみが検出された(図13)。

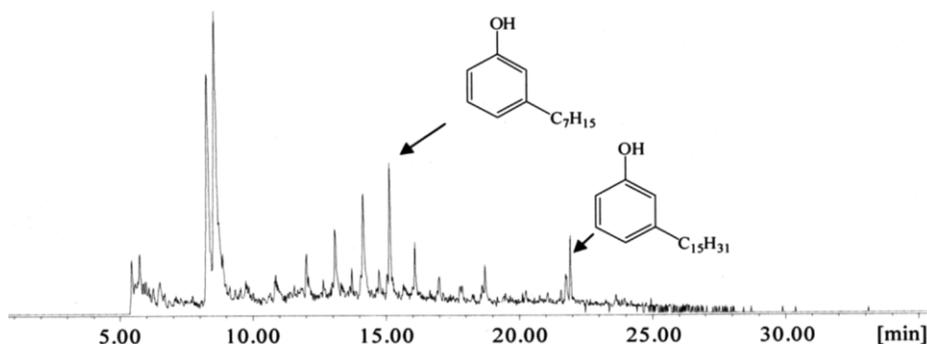


図13：PY-GC/MS分析による試料 No.5の主要脂質成分の同定結果（ウルシオールのみを検出）

3. 考察

本稿では、これまで国内では東南アジア交易を介した輸入漆の使用に関する実態が不明であった点に注目して、出土漆器の調査を実施した。桃山文化期におけるこれらの使用状況の一端を理解するには、海外に招来された伝世漆器ではなく、日本国内において考古学的に正当な行政組織で発掘調査が為されるとともに、年代観が明確な出土漆器の漆塗膜層から輸入漆の使用を確認することが必要である。そのため、東南アジア産漆が充填された四耳壺やこれらが付着した漆工用具と一括で出土した漆器資料の再調査を実施した。そして目視観察で選別した5資料から採取した塗膜剥落片である各試料の観察および分析調査を行った。

試料 No. 1 と試料 No. 2 は、内面の一端に円型のカット痕跡が観察されるので、筒状漆器の底板もしくは蓋板の破片と考えられる。この上塗り漆の表面には乾燥によるチヂミムラが顕著に観察された。そのため、これらは製作途中の未製品として廃棄された資料群であると理解した。このような筒状容器は、身と蓋からなる蒔絵螺鈿聖餅箱に代表される南蛮様式の初期輸出漆器とも共通する器型である¹²⁾。また、これらの試料はいずれも泥系のサビ下地(生漆を用いた堅下地・本下地より堅牢性に欠ける)が施されていた。この技法は、先行研究で報告されたフランス・ギメ美術館所蔵のそれとも類似する¹³⁾南蛮様式の初期輸出漆器では汎用性が高い下地技法である。もちろん試料 No. 1, 試料 No. 2 が初期輸出漆器の未製品の破片資料であるかどうかは、現時点では不明である。しかし、平戸のイギリスやオランダ商館長の日記などの文献史料の記述により、京都市中に存在したことは知られるものの、場所自体は特定されていない南蛮様式の初期輸出漆器の生産工房跡地を考える上で注目したい資料ではある。

一方、試料 No. 3 も同様の黒漆塗りの資料であるが、形態から耳盥の把手部分、試料 No. 4 と試料 No. 5 は、鶴亀などの日本独自の吉祥図様を漆絵加飾した朱漆器碗である。いずれも南蛮様式の初期輸出漆器とは異なり、当時の日常生活で広く使用された生活什器類の器型を有していた。北野によるこれまでの調査では、材質・技法面からみた日常生活什器である近世出土漆器の場合、細かい珪藻土や粘土鉱物を用いるサビ下地の資料群は希少であり、全体の80%強の大多数は柿渋や膠に炭粉を混入して作成する簡便な技法からなる炭粉下地の資料群である¹⁴⁾。本遺跡出土の漆器資料群も、目視観察による全点悉皆調査では炭粉下地が施された漆器資料の占有率が圧倒的に高い。そのなかで、本稿が調査対象とした出土漆器は、試料 No. 5 のみが炭粉下地であり、その他はいずれもサビ下地であった。さらに、試料 No. 3 は堅牢性を重視した布着せ補強の痕跡も確認された。そして各試料のPY-GC/MS分析結果では、サビ下地が施された試料

No.1～No.4からは日本もしくは中国産漆に特徴的なウルシオールとタイ・カンボジア・ビルマ産漆に特徴的なチチオール成分が混在した状態で検出された。その一方で、炭粉下地が施された試料No.5はウルシオール成分のみが検出された。これは、海外に一旦は招来された伝世漆器ではなく、たとえ数例とはいえ国内の遺跡から出土した製品もしくは未製品の漆器の漆塗膜から輸入漆の成分が検出されたという結果である。このことは、文献史料が記録する東南アジア産の輸入漆が確実に桃山文化期の日本国内で使用されていたことが初めて裏づけられものといえよう。

ところが、これまでの漆工史の分野では、基本的に国産漆塗料の品質の良さが強調されるため、常に東南アジア産漆塗料の品質評価は低く見積もられてきた¹⁵⁾。事実、今日の漆工産業の分野では、良質で希少な国産漆が高価であるため、廉価な中国産などの輸入漆の需要が大半を占めている現状がある。そのため、桃山文化期においても輸入漆はあくまでも国産漆の補填のために使用された粗悪な漆塗料(安価な外来漆)であったとする意見が根強くある¹⁶⁾。

確かに当時の国産漆と輸入漆の価格を含めた比較を明確に示した文献史料は希少であるため、両者の漆塗料に対する認識には不明な点が多いとされている。そのなかで、慶長10年(1605)『宇都宮大明神御建立御勘定目録』には、宇都宮大明神本殿の造営に際し、朱6630匁を錢4貫770文、漆5,320匁を錢5貫485文(すなわち朱1匁=錢7.2文、漆1匁=錢1.03文)で調達したことが記録されていた。一方、年代は下るが正保2年(1645)の『長崎オランダ商館長日記』には、輸入漆は1ピコル当り30テールであるが、同時に辰砂(天然朱)は1ピコル当り130テールであった。ちなみに、江戸時代以降、朱や辰砂は人造の量産化が確立したベンガラに比較して極めて高価品であったため江戸幕府が堺朱座で統制を図ったことが知られる¹⁷⁾。勿論、両者の文献史料の記録は、条件が異なるために、単純な価格比較は困難であるものの、前者における朱の価格は国産漆の約7倍、後者の場合、天然辰砂の値段は輸入漆の4.3倍の価格比率で算定される。そのため、輸入漆と国産漆の価格認識にはそれほど大きな隔たりを持って認識されていたとは思えない。さらに、寛永13年～18年(1636～1641)に記録された平戸オランダ商館の『輸出入物資仕訳帳』によると、寛永14年(1637)11月26日には、日本の漆80テール(800斤)を11.43テール、同40テール(400斤)を5.65テール、すなわち当時の米1俵に近い1ピコル(100斤)当たり1.41～1.43テールで買い付ける一方、同年の12月5日には大坂商人ゴロベエにカンボジア産漆1ピコル当たり59.3テール(銀593匁)、タイ(シャム)産漆1ピコル当たり43.5テール(銀435匁)、さらには油と水の混じった不純品漆を1ピコル当たり40テールで売却している¹⁸⁾。もちろん買値と売値は異なるため、平戸オランダ商館は輸入漆をそれよりかなり安く買い付けているものの、基本的には輸入漆は国産漆に比較して高価品であるとの認識が国内の漆工業者間には存在していたようである(表1)。

この点に関連して、本稿における調査結果では、ウルシオール成分を基本的に日本産漆由来と想定するならば、サビ下地や布着せ補強を施すなどの優品資料には東南アジア産の輸入漆と国産漆とのブレンド漆が、炭粉下地を施したやや一般的な資料には国産漆が単独で使用されていた。ウルシオール成分を持つ国産漆は、その特徴として透きが良いため、黒漆を作成するには良質で微細な墨粉を混入するか、鉄キレートにより黒色化させる必要がある。その一方で、チチオール成分を持つタイ・カンボジア・ビルマ産漆はブラックツリーとも評されるように、固化被膜は黒艶が強い性質を有するため、そのまま黒漆となる。この点を考慮に入れると、桃山文化期の人々は、決して東南アジア産の輸入漆を安価な代替塗料という認識の基に、高価で調達が困難な国産漆の水増し増量のために両者をブレンドしたわけではなく、目的に応じて比較的優品の漆器生産に使用したことが想定される。

表1 輸入漆の価格一覧表

平戸商館 買い価格	品目	1ピコル 当たりの価格	総点数	総額	備考：その他	
1637年11月26日	日本の漆 (80テール=800斤)	1.43	800斤	11.43		
	日本の漆 (40テール=400斤)	1.41	400斤	5.63		
1638年8月18日	黒漆 (1ピコル=100斤)	10	3800斤			
	黒漆 (1ピコル=100斤)	12	1100斤			
	壺と密封用樹脂			3.14		
1640年8月7日	特上品	25		420		トンキンより
	上等品	20.8				
	中等品	18.6				
1641年1月3日	最上級品	16.13				
	下級品	3.57				
1641年10月27日	カンボジア産漆	6.11				
	タイ(シャム)産漆	8.98				
同 売り価格						
1637年12月5日	カンボジア産漆	59.3(銀593匁)			大坂商人 グロベエ 宛	
	タイ(シャム)産漆 油と水の混じった不 純品漆	43.5(銀435匁) 40				
1638年10月28日	カンボジア産漆	79.56			サカタ ソージロウ 宛	
	タイ(シャム)産漆	66.66				
1639年11月16日	タイ(シャム)産漆	38.26			大坂商人 マチヤ グロベエ 宛	

比較：米の買入れ価格

日付け	品目	1俵の価格 (テール)	総点数	総額	備考：その他
1635年11月12日	米 1俵(80斤入り)	1.6、1.48	25	40	
1635年12月31日	米 1俵	1.48(銀14匁8分)	574		
	米 1俵	1.56	2430		
	米 1俵	1.64	996		
1636年11月2日	未脱穀米 1俵 (54マート：108斤入り)	3.56			
	未脱穀米 1俵 (54マート：108斤入り)	2.2			
	精白米 1俵 (40マート：80斤入り)	2.58			
1641年10月24日	小麦粉 1俵	1			
1641年1月13日	精白米 1俵 (40マート：80斤入り)	2.05	800	1640	

ただし、高温多湿の地域で使用された東南アジア産の漆塗料は、日本の気候風土では固化しづらいとの意見もある。この欠点を解消する目的で、当時の漆職人は経験則により国産漆と輸入漆をブレンドして固化促進を促していた可能性は、本稿における調査結果とともに、本資料群と同一遺構から出土した漆塗刷毛に付着固化していた漆塗料においても同様にウルシオールとチチオール双方の成分が検出されたため、双方何らかの関連性がある。

このような東南アジア産輸入漆の使用を具体的に示す文献史料の一つに、前記した平戸オランダ商館の『輸出入物資仕訳帳』がある。それによると、平戸オランダ商館は寛永12年(1635)12月21日に京都のマキヤ(蒔屋)シエモンから漆器94個購入し、同12月28日に黒漆を95斤販売していた。その他の漆塗料は、京都・大坂の商人への専売であった。このような記述からは、平戸オランダ商館は、東南アジア産の輸入漆塗料を一括して京都の蒔絵工房に現物支給して南蛮様式の初期輸出漆器の生産にあたらせ、その後、平戸や長崎から東南アジアやヨーロッパ諸国に輸出した可能性を示唆している。その意味では、筆者らも含め、幾つかの南蛮様式の初期輸出漆器の形態を有する伝世漆器の漆塗膜片を分析調査した結果、基本的な漆塗り技術や蒔絵や梨子地の加飾技法は日本の伝統的な漆工技術を用いているにもかかわらず、上塗りの漆塗料には東南アジア産の輸入漆が用いられた漆器が幾例か確認された^{#2)}。この事実は、一度海外に招来されたというこれら伝世資料の来歴云々は注視する必要はあるが、今後、桃山文化期における輸入漆と輸出漆器の間には密接な関連性が存在した物的証拠となるかもしれない。

また、寛永17年(1640)8月10日には、カンボジアから平戸に入港したフライト船カストリクム号の積荷には黒漆収納用壺1205個(616テール14マース)が含まれており、一連の出土四耳壺はこれに相当しよう。一方、マキヤ(蒔屋)シエモンから平戸オランダ商館が購入した漆器には、南蛮様式の初期輸出漆器の形態を呈する櫃・箆筒・書見台・机などとともに、これよりはかなり廉価な一般什器である一括揃いの朱塗椀や膳、重箱・耳盥なども含まれていた。確かに本稿の調査対象資料は、螺鈿や蒔絵加飾を多用した南蛮様式の初期輸出漆器とは異なる椀や耳盥、筒状容器などの一般什器の形態を呈する近世出土漆器であった。これらにも、国産漆だけでなく、東南アジアから輸入された輸入漆が使用されていた。上記の記述を考慮に入れると、本稿で調査対象とした出土漆器の性格が、あくまでも国内向けに生産された什器類なのか、それとも文献史料に登場する南蛮様式の漆器以外の初期輸出漆器に相当するのか、現段階では双方の可能性がある。この点に関する検証も、今後の重要な調査課題であるといえよう。

4. まとめ

以上、本稿では、桃山文化期の日本国内では輸入漆がどのように使用されたかについて、年代観と出土状況が明らかな出土漆器を中心に調査を進めた。これまでの文献史学の分野では、南蛮交易や御朱印船交易などの活発な海上交易を通じて、東南アジア産漆が数多く国内に輸入されたこと自体は知られていた。しかし、その調達や使用方法についてはほとんど注目されてこなかった。幸い、これまでの筆者らの一連の調査により、少なくとも日本国内にはタイやカンボジア、ベトナムから四耳壺に充填された輸入漆が調達され、特に京都市中の町屋跡ではこれらを用いた何らかの漆作業が存在したことは理解されるようになってきた。

ところが、このような東南アジア産の漆塗料は、あくまでも不足しがちな国産漆塗料の補填のためにのみ使用された安価な代替漆塗料であったとする意見が根強くある。さらにはそもそも日本の気候風土では東南アジア産漆塗料は使用に耐えないため、「漆」という固有名詞の翻訳自体を否定する意見なども根強く存在している。一方、海外の研究者からは、輸入漆は南蛮様式の初期輸出漆器の生産に積極的に使用されたとする意見も出されるなど、輸入漆の存在と使

用を巡っての議論はやや渾沌とした状況にあった。

その意味では、本稿は、少なくとも海外に一旦は招来された伝世品の漆器資料ではなく、たとえ数例とはいえ東南アジア産の輸入漆が桃山文化期の日本国内で確実に使用されたことが確認された最初の報告事例報告である。そして、これら東南アジア産漆の成分が検出された出土漆器は、サビ下地を施すなど出土漆器の中では比較的優品に属していた。そのため、当時の人々は、決して東南アジア産輸入漆は国産漆の単なる代替塗料と認識していたわけではなく、これらを比較的優品の漆器生産にも使用していた可能性が指摘された。このことは、文献史料からみた国産漆と輸入漆の価格比較の記録を裏付ける物的証拠かもしれない。

さらには、確かに東南アジア産の漆塗料は日本の気候風土では固化しづらい性質はあるものの、この欠点を補完する目的で国産漆と輸入漆をブレンドして固化促進を促していた可能性も同時に指摘された。すなわちこの状況は、従来の漆工史の考えに従い、単純に東南アジア産の輸入漆を国産漆充当の水増し増量目的でブレンドしたと理解するよりは、当時の漆器生産職人の経験則に裏付けられた技術力の高さを示す内容であると考えられる。

今後は、さらに調査事例を増やすことで、桃山文化期における日本国内の東南アジア産輸入漆の調達と使用に関する実態解明を充実させ、当時の漆文化の在り方をさまざまな角度から追究していきたい。

(謝辞)

本調査を進めるに当たり、京都市考古資料館・二戸市教育委員会・平戸市教育委員会・南蛮文化館・東慶寺などには関連資料の調査で協力を得た。改めて謝意を表す。なお本稿は、平成25年度高梨学術奨励基金助成事業『出土漆器からみた桃山文化期における漆文化の解明』(研究代表者：北野信彦)の成果の一部を含む。

注

- 1) 筆者らが輸入漆塗料に関する一連の調査を行う以前にも、PY-GC/MS分析法を用いて南蛮様式の初期輸出漆器にチチオール成分を検出した先行調査は幾つかある¹⁹⁾。しかし、当時は、あくまでも和製漆器からは日本産漆塗料が使用されることが大前提であると考えられたため、東南アジア産漆成分の検出は、その資料自体が和製漆器を模した近・現代の東南アジアもしくは中国製品であるという結論、すなわち南蛮様式の初期輸出漆器の真贋鑑定に応用されてきたという経緯があった。ところが近年の研究では、和製漆器を模した漆器は、桃山文化期から江戸時代にも中国・東南アジア、さらにはヨーロッパでも精緻な疑似漆器が製作されていたことが確認されており、今後の初期輸出漆器の重要な調査課題となっている²⁰⁾。
- 2) 筆者らもこれまで南蛮様式の初期輸出漆器8点について塗膜断面観察を実施しているが、何れも同様の泥系のサビ下地であった。また、PY-GC/MS分析調査を実施した結果では、8試料中の4試料からチチオール成分のみを検出した²¹⁾。

参考文献

- 1) 特別展「変革のとき 桃山」実行委員会：名古屋開府四〇〇年 記念特別展 変革のとき 桃山，名古屋市博物館・中日新聞社，(2010)
- 2) 吉村元雄：高台寺蒔絵概説，高台寺蒔絵，京都国立博物館，(1970)

- 京都国立博物館 編集：桃山時代の漆芸，淡交社，(1977)
- 荒川浩和・小松大秀・灰野昭郎：日本の漆芸3 蒔絵III，中央公論社，(1978)
- 京都国立博物館 編集：高台寺蒔絵と南蛮漆器，(1989)
- 3) 村上直次郎：長崎オランダ商館の日記 全3巻，岩波書店，(1956,1957,1958)
 - 4) 永積洋子：平戸オランダ商館の日記 全4巻，岩波書店，(1969,1969,1969,1970)
 - 5) 北野信彦・小椋山一良・竜子正彦・高妻洋成・宮腰哲雄：桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査，保存科学**47**，37-52，(2008)
 - 6) 北野信彦・竜子正彦・川口洋平・川村紀子・本多貴之・宮腰哲雄：桃山文化期における輸入漆の調達と使用に関する調査，日本文化財科学会第27回大会研究発表要旨集，80-81，関西大学，(2010)
 - 7) 北野信彦・小椋山一良・木下保明・竜子正彦・本多貴之・宮腰哲雄：桃山文化期における輸入漆塗料の流通と使用に関する調査 (II)，保存科学 **48**，133-145，(2009)
 - 8) Arlen Heginbotham・H. Khanjian・R. Rivenc・M. Schilling：Preprints of Icom-CC 15th Triennial Conference, New Delhi, India, (2008)
 - 9) Anne-Solenn Le Ho・Martine Regert・Oliver Marescot・Chloe Duhamel・Julette Langlois・Tetsuo Miyakoshi・Christophe Genty・Michel Sablier：Molecular criteria for discriminating museum Asian lacquerware from different vegetal origins by pyrolysis gas chromatography/mass spectrometry, Analytical Chimica Acta **710**，9-16，(2012)
 - 10) 京都市埋蔵文化財研究所：平安京左京三条四坊十町跡，(2004)
 - 11) 北野信彦：近世漆器の産業技術と構造，雄山閣，(2005)
 - 12) 荒川浩和 編著：南蛮漆藝，美術出版社，(1971)
 - 山崎剛：日本の美術II 海を渡った日本漆器I (16・17世紀) **426**，至文堂，(2002)
 - 13) 加藤寛：日本の美術I 海を渡った日本漆器III (技法と表現) **428**，至文堂，(2002)
 - 14) 北野信彦：近世出土漆器の研究，吉川弘文館，(2005)
 - 15) 松田権六：うるしの話 岩波新書 青版542，岩波書店，(1964)
 - 沢口悟一：日本漆工の研究，美術出版社，(1965)
 - 16) 村木二郎 編：南蛮漆器の製作背景，時代を作った技 ―中世の生産革命，176-179，国立歴史民俗博物館，(2013)
 - 17) 北野信彦：ベンガラ塗装史の研究，雄山閣，(2013)
 - 18) 平戸市史編さん委員会：平戸市史 海外史料編I，II，III，平戸市，(2004,2010,2012)
 - 19) N. Niimura・T. Miyakoshi：Japanese and European Laquerware Arbeitsheft dea Bayerischen Landesamtes fur Denkmalpflege, 123-134, (2004)
 - 20) 永島明子：18世紀フランスの蒔絵熱 ―蒔絵層の剥ぎ取りと高度な模造の実例集一，学叢 第35号，京都国立博物館，107-132，(2013)
 - 21) 北野信彦：第5章 南蛮様式の初期輸出漆器 (いわゆる南蛮漆器) の材質・技法，桃山文化期における漆文化の実態に関する文化財科学的研究 ―公益財団法人 出光文化福祉財団：平成22・23年度調査・研究事業助成の成果報告書，93-109，東京文化財研究所，(2011)

キーワード：桃山文化期 (momoyama cultural period : the end of the 16th century ~the first half-yearly of the 17th century)；輸入漆塗料 (imported urushi paints)；南蛮様式の初期輸出漆器 (namban style exported lacquerware)；出土漆器 (excavated lacquerware)；熱分解ガスクロマトグラフ質量分析(Py-GC/MS : pyrolyzer Gas Chromatography/Mass Spectrometer)

Study on Urushi Paints Used in the Momoyama Cultural Period (III)

Nobuhiko KITANO, Kazushige KOHIYAMA*, Masahiko RYOKO*,
Takayuki HONDA*² and Tetsuo MIYAKOSHI*²

During excavation in the center of Kyoto (O-ike site) from 2003 to 2004, many four-lobed jars were excavated. These jars were used to stock imported urushi paint from Thailand or Cambodia from the end of the 16th to the first half of the 17th century. At the same site many traditional urushi paint tools produced in Japan during the Momoyama cultural period were also excavated. Results of elemental analysis by Py-GC/MS showed that the urushi paint was composed of *Melanorrhoea usitata*, *Rhus vernicifera*, *Rhus succedanla*, or their mixture. But there is no idea as to what objects, other than *namban*-style exported lacquerware, imported urushi paint was used for. Analyses of five lacquerware excavated at O-ike site showed that the urushi paint was compound of a mixture of *Rhus vernicifera* and *Rhus succedanla*. This result is material evidence that imported urushi paint was used on urushi objects in Japan.

*Kyoto City Archaeological Research Institute *²Meiji University